

# 「車いす利用者のための着付け・自装」プロセスの実践的研究

～ 2004年から2012年の「車いす利用者のための着付け・他装」研究を経て～

The Practical Research about How to Wear KIMONO on One's Own for Wheelchair User

山野愛子ジェーン<sup>1)</sup> 青木和子<sup>1)</sup> 佐藤美奈子<sup>1)</sup>

志村裕子<sup>2)</sup> 山下牧子<sup>2)</sup> 西川奈実<sup>2)</sup>

## 抄録

着付けとは、自分（以後自装とする）、または他人（以後他装とする）に対して、着物や衣裳を、正しく着せ付けることをいう。本研究の目的は、車いす利用者に対して、美容福祉を学んだ着付け師による着物着付けの技術を用いて、車いす利用者自らが自装できることをめざしている。健常者の中には、着物を日常的に楽しむ人もおり、車いす利用者の中にも同様の気持ちを持つ人もいる。そこで、従来おこなってきた「車いす利用者のための着付け」シリーズ<sup>1~4)</sup>に見る方法を基に、車いす利用者自らが行う場合の改善点や新たな方法の開発を行うことが必要となる。

今回の研究により、対象とした車いす利用者の肢体の可動範囲などにたいする、着付けに必要な過程の相互性について改善が必要な部分が抽出できた。車いす利用者であっても、さまざまな装いを楽しみたいという気持ちに変わりはない。「車いす利用者のための着付け」はそうした人たちのために開発した方法である。ならば、自分で着てみたい、という思いに応えていくことも筆者らの使命であると考え、本研究で得られた成果を報告する。

キーワード：車いす利用者 着物 着付け 自装 他装 美齢学

## I 背景

これまで行ってきた車いす利用者のための紋服・七五三・和装婚礼衣装等の他装プロセスの開発は着付け師業の領域を障がい者対象に拡張することが出来た<sup>1~4)</sup>。

車いす利用者が、これらの日本文化の通過儀礼に着物で参列することが叶ったことによって、車いす利用者の生活に新たな可能性や希望を持ってもらえるものともなった。例えば、障がいがあっても七五三を迎え豊かな感情の芽生える時期の我が子に、日本文化を経験させたいという両親の希望を叶えることになり、

成人式を迎える女性は、健常者の友人と成人式に参加できるという満足感を実感することになった。また婚礼を迎える花嫁は、両親への感謝の気持ちを自信をもって伝えることができた。

現代社会においても、日本人にとって民族衣装である着物には、特別な思いを持っており、誕生・成人・結婚・死等の儀礼に関わる着物は情動の変化にもかかわってくる。著者らは、通過儀礼のような「ハレ」の場<sup>5)</sup>ばかりでなくケの場つまり日常的にも、着物が単に装いの持つ意味以上に、個々の人間関係に影響を与え、情動にも影響を与えてきたことを実感している。

また車いす利用者と言っても、運動機能の障がいはさまざまである。運動機能に障がいのある人が着脱時に感じる衣服の問題点と既製の修正に対する意識について、着脱が自立している人と介助が必要な人で

1) YAMANO Aiko Jane AOKI Kazuko SATO Minako  
山野美容芸術短期大学

連絡先:〒192-0396 東京都八王子市鎌水 530

2) SIMURA Yuko YAMASHITA Makiko NISHIKAWA Nami  
国際美容協会 着装研究センター

連絡先:〒192-0396 東京都八王子市鎌水 530

美道会館 201 研究室

は、着にくさを訴える部位に違いが見られたが、既製服のデザイン性は残したい人が、自立度に関係なく被験者の8割以上であったと、雙田ら<sup>6)</sup>は述べている。

着付け師である著者らは、車いす利用者に対して、これまで自立度に関わらず他装で対応してきた。日常生活において現代では、着物は「ハレの日」に着るものとなってきている。当然「ハレの日」の着付けは他装がほとんどである。しかし健常者が、日常つまり「ケの日」でも着物を楽しめるようにと着付け教室に通い自装するように、車いす利用者も自装して楽しみたいと考える人もいる。

そこで、着物のデザイン性を損なわないまま自装するためには、運動機能の低下に伴う着にくさや不具合点を明らかにして、実行可能な方法を考案し、車いす利用者にとっても、健常者と同様に自装教育実践モデルの開発が必要となった。

## II 研究の目的

車いす利用者の「着付けの自装技術」を教育するための実践モデルの開発には、叩き台の開発と同時に点検と改良を行う必要があった。実践する上で、評価の視点として、①実行可能性、②心身への負担度、③自装を体験したことによる情動への影響の3点を検討し、自装の実践モデルの改良を行うこととした。

## III 研究方法

### III-1 実践モデルの開発方法

研究方法としては芝野<sup>7)</sup>のソーシャルワーク実践モデルの開発のためのM-D&Dの手続きに沿って実施した。M-D&Dの手続きには、フェーズI（問題の把握）⇒フェーズII（実践モデルの叩き台の開発）⇒フェーズIII（点検と改良）⇒フェーズIV（普及と詠え）というプロセスが必要となる。

フェーズI：著者らは、これまで着付けのために様々な車いす利用者と接してきて、個々の障がいの多様性を確認してきた。特に上肢の可動範囲によっては、部分的な自装も可能な人がおり、また自装技術の修得を希望する人もいることを確認した。

フェーズII：著者らは、自装のために上肢だけを使って着付けを行うことで起こる着にくさや不具合につ

いて仮説を立て検討した。検討した点は以下である。

- ・山野式半衿（アイコー衿）の使い方
- ・車いすの高さに合わせる裾線の一定化の方法
- ・着物と帯の装着方法
- ・草履の着用方法

以上の内容を検討し、叩き台の開発を行った。

そして、今回の報告はフェーズIIIの点検と改良となる。被験者は着付けに興味があり、車いすを利用している社会人女性である。被験者には他装を経験していただいた上で、車いす利用者の着付け・自装のプロセスの実践に臨み、①実行可能性、②負担度、③情動（気分）について質問法と観察法で評価した。評価内容は以下のとおりである。

- ①実行可能性について：観察法を用い、時間と手間について他装した場合と比較した。②負担度と③情動（気分）：質問法で聞き取りを行った。

### III-2 対象者の特性

#### 【対象者の基本情報】

50代女性A氏 会社員 既婚  
日本人の標準的体型（やせ型）

#### 【身体機能と可動域等】

- ・胸椎10番損傷による脊椎損傷（障害者手帳では外傷性下肢障害1種1級 胸椎10番を損傷）
- ・運動機能、感覚機能ともに完全両下肢麻痺
- ・上肢の可動域には問題ない状態
- ・体幹は安定しているが、両手を離しての前傾姿勢を長時間保てないため、両手を使用する場合は、車いすの背もたれに寄りかかりながら、机に腕を保持したままで行う必要がある。

#### 【着物の着付けの経験など】

車いす利用者になる前から（幼少時を含む）着物を自装する経験があった。20代から車いすを利用。車いす利用者になった後にも、他者の援助を受け着物を着た経験があった。

車いす利用者になった後も積極的に活動し、遠距離を自分で運転し、海外旅行に出かけるなど活動範囲が広い。

### Ⅲ-3 自装技術の改良点

今回開発した着装技術写真①～⑫に技術内容を記載した。

写真①

車いす上で足袋と草履を着用。足袋は足のむくみを考慮しソックスタイプを使用。草履は脱げないように鼻緒に綿テープ状部材を使用。



写真②

装う方の身体の状態に合わせて、今回は洋服の上から特別に作った半衿(アイコー衿)を着用。(襦袢を省く)



写真③

あらかじめ作っておいた二重太鼓を車いすにセット。この時、帯揚げと帯締めを車いすの後ろで軽く結び固定しておく。



写真④

帯の上に着物をセットし、その上に移乗。着付けに必要な道具を近くにセットしておく。



写真⑤

裾線の高さを確認しながら、下前・上前を合わせる。



写真⑥

両袖を通し、顔の正面で共衿を合わせ、背中心を確認できれば、衿をクリップでとめる。



写真⑦

下前の衿を決めたら半衿と一緒に留める。先が二又に分かれたキモノベルトを使用。もう一方の先では、下前の裾線とおはしりを決めた残りの余分を持ち上げて留める。



写真⑧

キモノベルトを身八つ口から背中に回し、上前の衿元とおはしりも下前同様に整え決めたら、キモノベルトで留める。



写真⑨

着物の着付けが完成。この時、伊達締めは使用しても使用しなくてもよい。



写真⑩

次に、あらかじめセットしておいた帯を胴に回す。帯板を入れ後ろに回しお太鼓と背中の中を通して整える。



写真⑪

後ろに軽く結んでおいた帯締めを前で結び、飾り帯揚げを整えたら帯結びの完成。



写真⑫

最後に使用したクリップを外しできあがり。



### 【個人情報の取り扱い】

本研究は、被験者の承諾を得て進めており、個人の特定がなされない配慮を行っている。

## IV 研究結果

他装に関して A 氏の評価は以下のものであった。デザイン性に関しては、もともとある着物の形を全く変える必要がないため、デザイン性が損なわれない。

### ①実行可能性：

- ・時間がかからない（全行程、数分程度）
- ・着物は袖周りや合わせに余裕があるため、他の服に比べ着脱が簡単にできる

### ②負担度：

- ・身体への負担がない
- ・通常の着付けと何ら変わらない出来上がりであるため、ストレスなく達成感が得られた。

### ③情動の変化：

- ・「こんなに簡単に着られるなら着物を着て歌舞伎に行ってみたい」という発言あり

特に②の負担度について、改良点も含めて詳しく見ていく。

（写真①）車いす上で足袋と草履を履く。足袋は足のむくみを考慮しソックスタイプを着用。草履は脱げないように鼻緒に綿テープ状部材を備えた。草履と足が一体となり負担感も少なくなった。

（写真②）長襦袢の代用として使用する衿を付けるタイミングは、車いすと 90° の角度で背もたれのあるイスをおき、移乗前につけておいたため、車いす上にセッティングした着物がくずれず、ストレスを感じることがなかった。

（写真③④）A 氏が自分で着物をセッティングする場合の自身の身体の位置と姿勢については、片手は車いすのひじ掛けから手放すことができないため、テーブルに対し直角に車いすを配置し片手で準備ができるようにしたため安全に短時間でおこなえた。

（写真⑤⑥）足元の感覚をえられないため、鏡で確認して裾線を合わせられたので、デザイン性が損なわれなかった。また下半身の感覚麻痺のため、下前の上に乗前の上前の前柄の部分を重ねても開いてしまうことへの対処として、新たに着物の余分を押さえるクリップを

利用。できるだけ車いすのアームサポートのガード付近にまで押し込むようにしており、見た目にも美しく動き出しても崩れにくくなり、ストレスを感じることもなかった。

（写真⑦）本研究では新たに留め金が2つ以上のキモノベルトを使用した。負担となっていない。

着物をセットし、着付けが終了するまでの全行程の所要時間は5分前後であり、他装で行う場合も5分前後で着付けが完了することから実行可能性も確認された。TPOによって変わるが、概ね車いす利用者は自装と他装でも数分で着付けが完了する。逆に健常者が、自装と他装を行う場合、どちらも20分程度はかかるため、様々な過程を簡略化できる車いす上での着付けの方が時間はかかっていない。

今回開発した自装技術に関しては、完遂し得た上で①実行可能性②負担度③情動の変化の点で、今まで行ってきた車いす利用者の他装とほぼ同レベルにあった。また、自装後に「自分で簡単に着られた」「着物がきちんと着られ、いつでも着物で外出できる」との感想も得た。これらの感想は、負担度や情動の変化以上に、達成感や主体的な生活意欲に関わる言動にまで高められていることも示している。

## V 考察

今回開発した自装技術に関しては、着付けが完遂し得たこと、ならびに時間、手間、着物をきちんと着られたという気持ちが高レベルであったことから、実行可能性・実用性を十分に有しているものと考えられる。

また、「着くずれることなく、きちんと着られた」「外出できる」との感想が得られた。これは、自装を体験し着付けが叶ったことで、着付けに対する自己効力感が増し、その結果「外出がしたい」といった情動の前向きな変化をもたらされたと思われる。

このことは自立した生活の維持改善に寄与するものと考えられ、社会的意義は大きいものと推察される。

厚生労働省は「自立」の概念を次のように定義している。『（自立とは）他の援助を受けずに自分の力で身を立てること』の意味であるが、福祉分野では、人権意識の高まりやノーマライゼーションの思想の普

及を背景として、『自己決定に基づいて主体的な生活を営むこと』、『障がいを持っていてもその能力を活用して社会活動に参加すること』の意味としても用いられている<sup>8)</sup>としている。A氏の例のように着物の着付けについて、自装したいという主体的な希望を形にしていくことは、一つの「自立支援」といえるであろう。もともとA氏自身の車いす利用者となっても生活を楽しむ工夫を忘れない生き方が、今回の自装の方法の開発につながった。

本研究での成果は、たとえ車いす利用者であったとしても、上肢機能の自立度が維持されていれば、自装が可能であること、つまり実行可能性が確認できた点である。これにより好きな時に着物を着て外出ができる、というポジティブな情動の変化をおこし、自己肯定感を高めたことにある。山野美容芸術短期大学では、生きるほどに美しくあることをめざす「美齡学」を推奨している。まさにA氏のように「美しく生きる力」を身につけることを選択し、自ら育むことは、多様性を持ち生きていく上での権利であると強調したい。

障がいのありなしや年齢に関わらず、多様性と共生の意義を持つ「生きるほどに美しく」という生き方は、こうした常に自らを美しく保とうとする努力や姿勢によってつくられるものであり、そうした思いを叶えるために環境を整えることこそ美齡学の根幹をなすものと著者らは考えている。そして、着物の持つ機能は「ユニバーサルデザイン」として幅広い可能性を秘めていると実感した。

今回の報告は、他装着付けの経験を有する対象者1名から得られた結果であり、一般化に向けては性、年代、障がいのレベル、着付けの経験等を踏まえた更なる検証が望まれる。これらの結果を踏まえ、今後はフェーズIVへと進めることが望まれる。

**謝辞：**本論文の刊行にあたり、査読者から有意義な助言をいただきました。謹んで感謝申し上げます。

## 参考文献

1) 山野愛子ジェーン 他:車いす利用者のための和装婚礼衣装.山野研究紀要.12.23-32.2004

- 2) 山野愛子ジェーン 他:車椅子利用者のための紋服.山野研究紀要.14.1-11.2006
- 3) 山野愛子ジェーン 他:車イス利用者のための七五三.山野研究紀要.15.51-55.2007
- 4) 山野愛子ジェーン 他:車イス利用者のための成人式.山野研究紀要.20.17-20.2012
- 5) 猿田佳那子 :車椅子使用者の社会活動を支援するための被覆構成―「ハレ」着の事例研究―.同志社女子大学 総合文化研究所紀要.26.76-88.2009
- 6) 雙田珠己 他:運動機能に障害のある人が着脱時に感じる衣服の問題点と既制服の修正に対する意識.日本家政学会誌.55.12 .967-974.2004
- 7) 芝野松次郎:ソーシャルワーク実践モデルの D&D -- プラグマティック EBP のための M-D&D.有斐閣.頁・頁. 2015
- 8) 自立の概念等について <https://www.mhlw.go.jp/shingi/2004/04/> (2019.10.日付)
- 9) 学校法人山野学苑:四訂美容福祉概論―その知識と実践技術.中央法規出版.頁・頁.2016
- 10) 大田仁史:完全図解 Ultimate Practical Care 新しい介護.講談社.頁・頁.2003
- 11) 牧島邦夫:衣服の科学―ヒトと衣服の関係―.東海大学出版会.頁・頁.1995

(受付：2019.10.4, 受理：2020.2.15)